



ASIAN KUNG-FU GENERATION 後藤正文氏

INTERVIEW

100年先へつなぐ音楽の場所

— 最新技術と“変わらない創作”が交わるスタジオ —

取材・文：ネットギアジャパン

静岡県・藤枝市に誕生した「MUSIC inn Fujieda」。
ASIAN KUNG-FU GENERATION 後藤正文氏が中心となり
立ち上げたインディペンデントアーティスト支援プロジェクト
「APPLE VINEGAR - Music Support」の中核となる滞在型スタジオだ。
目指すのは、単なるレコーディングスタジオではない。
“100年先も残る場所”。その思想と未来像について、後藤氏に話を聞いた。

■ 導入先

静岡県・藤枝市
「MUSIC inn Fujieda」

なぜ今、滞在型スタジオなのか

「8年前に“APPLE VINEGAR - Music Award”を立ち上げた頃から、インディーズの現場ではレコーディング予算が年々縮小しているのを感じていました。」

「APPLE VINEGAR - Music Award」は、後藤正文氏が2018年に立ち上げた私設音楽賞だ。文学の芥川賞をモデルに、キャリア初期のアルバムを対象に選考し、賞金や支援を通じて新進気鋭のミュージシャンの制作活動を後押ししてきた。その活動を通じて、後藤氏は現場の変化を目の当たりにしてきたという。ドラム録音ですらコストの問題で自宅制作へ移行する流れ。レコーディングスタジオは減少し、若いアーティストが十分な環境で音楽を作る機会に限られている。

「もう少しいい環境で音楽を作らせてあげたい。みんなが自由に使えて、ドラムだけでも録って帰れるような場所があったらいいのに、というところから始まりました。」

物件を探す中で出会ったのが、藤枝の築130年の土蔵だった。



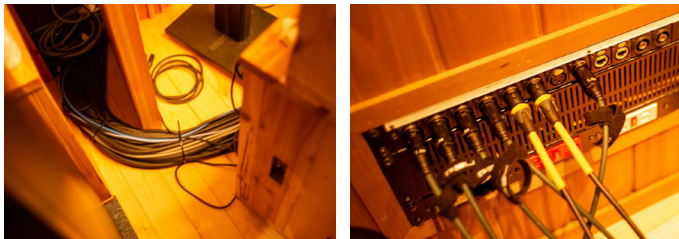
土蔵のあるがままの形を生かしつつ、響きにこだわったスタジオの天井。

スクラップ・アンド・ビルドではなく、残すという選択

「古い建物は壊される運命にある。でも、100年残ってきた土蔵をスタジオにしたら、次に来る人が“壊していいのかな”とためらうはずなんです。」ニューヨークやロンドンでは、古い建物を活かし、中身だけを更新していく文化がある。藤枝でも同じように、“壊さない未来”を選びたかったという。

「建物は強く残す。変わっていくのは、そこをつなぐラインや設備の方です。」実際、スタジオ内には将来を見据え、多数のLANケーブルが敷設されている。「エンジニアから“50年後は全部LANでやるだろう”と言われて、だったら今の世代の責任として、先に通しておこうか。」

建物は残し、インフラは進化させる。それが“100年設計”の考えだ。



各部屋にはXLR、SDIに加え、将来の拡張にも対応可能なLANケーブルが敷設されている。

この時代に、なぜスタジオなのか

音楽制作は今、大きな転換期にある。AIは作曲やミキシングの現場に入り込み、制作効率は飛躍的に向上している。「多くの商業音楽は、これからAIが書く時代になるかもしれない。」それでも後藤氏は、スタジオという“場”の価値はむしろ増すと語る。「AIは曲を書ける。でも、体験は代わりにやってくれない。仲間と集まって、言い争って、泊まり込んで作品を創った時間。その喜びはコピーできない。」

かつてライブハウスに“チケットノルマ”を払ってでも出演したのは、体験に価値があったからだ。「1万円で1日遊べるなら安いと思っていた。レコーディングも、そういう体験になっていくんじゃないか。」

スタジオが消えれば、文化そのものが消える可能性がある。だからこそ、残す意味がある。

見えないインフラの重要性

電源やネットワークといったインフラについて尋ねると、後藤氏は即答した。「めちゃくちゃ大事です。もう水道やガスと同じレベルのインフラですよ。」音楽制作機材はすべて電気で動く。ネットワークは制作・配信・データ管理を支える生命線だ。「普段は意識しないけど、Wi-Fiがつかないだけで不安になる。それぐらい、今は当たり前の基盤になっている。」

こうした思想のもと、当初はDanteを中心としたシステム構成を前提としながらも、将来的にはST2110やAVB、NDIといった各種AV-over-IPへの対応を見据え、NETGEARの「MSM4332」を2台導入している。MSM4332は、マルチギガ(1G/2.5G/5G/10G)対応、25Gアップリンクによる十分な帯域確保、PoE++による機器収容力、SMPTE ST2110やAES67などの放送規格対

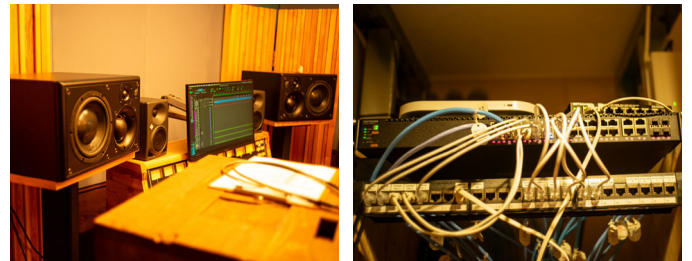
応、PTPによる高精度な時刻同期といった仕様を備え、将来の拡張性と安定性を両立できる基盤として選定された。その設計思想は、この“100年設計”の方向性とも重なっている。

最新のIP技術は、単なる利便性向上ではない。未来の制作形態に備える“余白”でもある。「今は準備段階。将来、立体音響や新しいフォーマットが当たり前になった時、対応できるデータを残しておかないといけない。」24bit/96kHz以上で録音するのも、その思想の延長線上にある。

変わらないものと、変わり続けるもの

「建物は強いまま残す。ケーブルやアウトボードは変わっていく。」

この言葉に、スタジオの思想が凝縮されている。IP化は、過去を否定するためのものではない。むしろ、古い建物やアナログ機材と共存するための技術だ。真空管アンプと光ファイバー。土蔵の壁とLANケーブル。最新技術と、変わらない創作体験が変わる場所。



音楽の未来を支える、見えない基盤

「地域に根付いてほしいですね。静岡ならではのシーンがあって、音楽が街の中に自然にある。」災害時の拠点になるかもしれない。地域の相互扶助のハブになるかもしれない。」

「音楽は、街から浮いた存在じゃなくていい。みんなと関わりながら、自然にそこにある場所になれば嬉しい。」

100年後、設備は入れ替わっているだろう。フォーマットも、再生環境も変わっているかもしれない。それでも、壊さずに残した建物、拡張可能なインフラ、体験を重視する思想があれば、文化は続く。

音楽は、最新技術だけでは生まれえない。しかし、最新技術がなければ守れない未来もある。藤枝の土蔵スタジオは、変わらない創作と、進化し続けるIP技術が変わる場所として、静かに未来を待っている。

製品



ProAV対応フルマネージスイッチ
MSM4332